

平成20年度第3回市川市PTA連絡協議会オリエンテーション

市川市PTA連絡協議会会長佐藤氏挨拶

まずは元気よくご挨拶をしたいと思います。

「おはようございます！」

第1回と第3回は講師の先生をお招きしてお話を聴いていただくことになっております。

本日も講師の先生のお話を聴いていただき、学校に持ち帰り伝えていただければと思います。

また、今後の子育てや活動に役立てていただければと思います。

劇作・演出家市民文化プロデューサーNPO 法人代表 吉原ひろし氏

おはようございます。吉原です。真間に住んでおります。ちょうど1年前の2月16日に飼い犬が死にました。

毎日、じゅんさい池の周りを犬と散歩していました。まもなく1周年ですが、この1年、気落ちしたままでした。犬が死んでこんなに悲しいのだから、お子さんを失った親御さんの気持ちは計り知れません。

私はお芝居や舞台の作家や演出をしています。市川市で今度、ミュージカルをやりたいからと、協力を依頼されました。

芝居はお金にはなりません。とても楽しく、若い頃は、全国を巡業しておりました。

野田市の市民ミュージカルの演出をしたのがきっかけで

2002年に市川市で市民ミュージカルを行いました。「ソデタケノ マツ」)

はじめは金銭的な理由もあり、あまり気が進まなかったのですが、引き受けたからには3回(6年)までは、責任を持ってやろうと思ひまして、これがやってみたら、とても楽しかったのです。2回目からはきちんとした組織を作ろうという話になり、「市川市民ネットワーク」という文化団体ですが、NPO 法人という形にしました。

まずはミュージカルについて話をしたいと思うのですが、子どもから大人までの出演者が300人、裏方さん・お手伝いさんが200~300人。最初は2ステージの2回公演を行っていきまして、その後は4回公演になり、前回は3回公演で、4000人~5000人のお客様に観ていただきました。市川市の人口が47万人くらいですから、人口のおよそ1%の方に観ていただいたということになります。

僕自身、当初は「子ども達の為・障害を持つ子どもの為に」ということはあまり考えてはいませんでした。

とにかく、「楽しむ」「おもしろいことをやろう」ということが僕の市民活動のキーワードです。おもしろくなければ、やめる。おもしろいと思えなければ、おもしろいと思えることにかえる。観に来てくれるお客様はもちろん、出演者やスタッフも楽しく活動できるものをと考えています。

PTA活動もそうだと思うんです。嫌々やるよりもおもしろがってやるのが大切だと思

います。おもしろいというのは、与えられるものではなく、自分で作っていくものです。おもしろくないものも、おもしろいと思えば、おもしろくなるのです。おもしろさをわかった子どもたちは、たいへん変わっていきます。

5才～73才までの人間が集まり、稽古をするのですが、いつも言っていることがあります。何の為にこの市民ミュージカルをするのか」ということです。目的をハッキリしておかないと、

皆さん、一生懸命に熱くなりすぎて、人を押しつけてでも、自分が目立ちたい・演技が上手になりたい となってしまうのです。

市民ミュージカルでは4つの大きな目的を持ってやっています。

1つは「3世代・世代を超えた交流をやろう」

当初は子ども達の表現活動をする為だということでしたが、僕自身は子どもたちだけのためにとはかんがえず、大人と一緒に活動することが、子どもたちの為になるのではないかと思います。

子どもは、すぐセリフも覚え、早いテンポのダンスもすぐに踊れてしまいます。

ただ、大人も負けてはいれず、カッコいいダンスなんかを、踊ると、子どもたちが今度は「かっこいい！」と憧れ、刺激を受けて、どんどん吸収していくのです。ですから、大人と子どもの交流はとても大切だと思います。

2つめは「自分達の町を愛そう」ということです。

僕は市内で仕事をするわけではなく、都心や地方で仕事をし、寝るために帰ってくるだけで、地域との交流はおろか、近隣との交流もしていませんでした。

以前、市民ミュージカル公演で地元につわる話をしたことがありました。その時、ある男性から、やっぱり自分たちの町の話っていいよねー」と言われ、僕もそう感じていたので、それからは地元につわるはなしを題材にすることにしました。もちろん市民ミュージカルはオリジナルのもので、僕が台本・演出をしているわけですが、なるべく地元の話を取り入れるようにしています。

3つめは「創造の喜びを子どもにも大人にも味わってもらいたい」ということです。

大人がバカみたいに夢中になり、練習をし、いざ本番は1000人強のお客様の目が全部自分に向くのですから、これは誰がやっても快感です。皆さんも何か表現する機会がありスポットライトを浴びれば、やめられなくなると思います。役者は3日やったらやめられない」といいますが、本当にそうだと思います。これが人間の真理だと思うのです。皆、「自分を見てもらいたい」んです。おとなでもそうですから、子どもはその欲求が強いです。子どもの時にその欲求を解消してあげると、自分に自信が持てるようになります。

なぜ子どもに表現する場が必要かと言いますと、様々な専門的見解もありますが、

「注目」されるということは色々な人から見られるということで、人が人を見つめることにはエネルギーがあるわけですから、太陽光から沢山のエネルギーをもらえるように、表現する場があり、注目してあげれば、子どもたちも沢山のエネルギーをもらえるわけです。舞台はそれができる場ですので、皆に楽しんでほしいと願っています。

「みんな、友達になろう」とこれが4つめです。お客様もふくめみんながその場でひとつになり、友達になればと思います。

(10分間、前回の公演を編集したものを上映)

(8分間、障害を持つ子どもたちのミュージカル「サファリ予告」を上映)

市民ミュージカルで活動している中、障害を持つ子どもたちに出会いました。

その子達の親御さんから、「今度は障害を持つ子どもたちが参加するミュージカルをお願いします」といわれたのがきっかけで、毎年、チャレンジドミュージカルを公演することになりました。

障害を持っているからと、家や施設に引きこもりがちになってしまっているようで、ミュージカルをやって、自信をつけ、町に飛び出せればと思いました。偏見などには負けず、(偏見を持っている人間のほうがおかしいと僕は思いますので・・・)

当初はどんなミュージカル内容にしたら良いかわからず、4日間子どもたちと遊んですごしたりもしました。

2002年当初から比べ、市民ミュージカルに参加する子どもたちの数が減ってきました。

特に5～6年の子どもの数です。子ども達も忙しくなっているのでしょう。

また、以前は舞台稽古も30分～1時間くらいは平気で頑張っていました。近年、15分で「休憩まだ～？」と言われ、同時に、ぺちやくちやおしゃべりを始めてしまい、集中力がありません。

学校の先生もPTAの皆さんもなんとか「根気」というものを植えつけようと思っただけではと思っています。

舞台稽古は15分やっただけでは何の意味もありません。稽古というのは1日5時間はやらないと意味がないのです。もちろん、休憩は取りますが、最低でも1時間は通してやらないと体も動きませんので、子どもだろうが、大人だろうが、僕はやってしまいます。

最初はふてくされ気味でやっている子どもも自然と「なんとかしなきゃ」と思うらしく、だんだんがんばって稽古をするようになり、本番直前まで、僕は「だいじょうぶかな～」と不安だったのですが、本番は皆張り切って、大成功でした。

僕が主張したかったのは大人たちに、子どもとはなんなのか？

ということです。子どもにもそれぞれの大人に対しての主張があり、何を大切にしているのか？

それを実際に子どもたちに聞き、セリフにもしましたが、子どもにも人格や権利があるんだということを主張したかったのです。主張とわがまま・権利と身勝手など、区別のつかない部分も子どもですから、あります。でも、子どもの権利を認めてあげるところから、大人と子どもの関係が生まれてくるものだと思います。

大人も子どもも、一緒に稽古をする中で変わっていく瞬間があり、またそれを共有できる数ヶ月は大人にも、良い時間なのではないかと思っています。

チャレンジドミュージカルでは当時大学1年生だった学生たちが、障害を持つ子のお世話をしていましたが、初めは僕から見ても頼りない学生たちだったのですが、教室を勝手に飛び出す、その辺をいきなり駆けまわる子に、どう接してよいかわからなかったようですが、「こいつをちゃんと見なくちゃ」と思い、過ごしていくうちに、彼ら大学生がとても良い表情になり、成長していったのです。先日4年生になった学生たちの送別会では皆、

涙、涙の感動的なものでした。

やはり、大人も、子どもと接して大切なことを得られるのだなと僕には大発見でした。

さて、時間になってまいりましたが、もう1点、NPOについてお話しさせていただきます。

NPO（非営利団体）ですが、社会事業・社会貢献活動です。

僕が目指しているのは、社会事業です。社会に貢献している若者たちが、それで飯を食っていけるような社会になればいいなと思います。

市川市の22年後、社会福祉の分野では、100億円の赤字が予想されているそうです。もちろん行政の努力も必要ですが、僕は、NPO（ボランティアを含め）がきっかけになると思います。市民1人、1人がなんらかの形でかかわることが大切になると思います。

行政や偉い人たちに任せてばかりではなく、自分たちが責任をもって社会を作っていくんだという発想はどうしてもこれから必要になってくると思います。

そして、自分たちが住んでいる市や町を好きになってもらいたいと思います。家族・友人・隣人・・・そして町を・・・市を・・・

交流しながら、みんなで楽しく過ごしていければと思います。

そこに人間が住んでいる以上、文化は生まれます。全ては「たのしく、おもしろいことをやろう」という気持ちからだと思います。

これからも、楽しく、おもしろい市川を作っていこうと思います。

ありがとうございました。

質疑応答

宮久保小 PTA 会長>

「ソデタケノ マツ」 とは具体的に どのような話ですか？

吉原氏> 昔、泥の坂道だったところに一本の、松があったそうです。祭りなどに向かう道中に滑って転ぶと縁起が悪いからと、袖のすそをちぎって、転ばぬように願を懸けたそうです。

宮久保小 PTA 会長>

地元で代々住んでいる、私たちが聞いている話と違う気がします。

また、寄付などのお話ですが、やはり、寄付をしつこく求められ、「出したくなくても、出さなくてはならない人もいる」こともわかっていただけたらと思います。

吉原氏> （寄付について）それは、そうですね。寄付はしつこいくらいに「寄付をください」でいいと思います。

以上